

こっそり
教えましょう

三好春樹攻略のための キーワード

■アイデンティティ

「アイデンティティ（自己同一性）の確立が大切」などと知ったかぶりに言う福祉関係者が多いが、三好に言わせれば「人間の中にある非同一的な部分に目をつぶることで成り立つ自己幻想」ということになる。つまり、老いや呆けていくことを内在化していない人間論である。

■浮いている人

老人への関わり方が熱心なあまり、楽をすることばかり考えている他の職員から嫌味なんぞのひつつも言われている人。「浮いてるんじゃない、他の人が沈んでいるんだ」とのコトバに涙した人が多いが、なかには本質的に浮いてしまっている人もいて、それはそれで面白い。

■ADL (Activities of Daily Living)

学会では「日常生活動作」と訳されているが、彼は「日常生活行為」と主張する。つまり、病院や訓練室でやっているのは「擬似ADL」であって、本当のADLは生活の場にしかなく、毎日の生活そのものを見て記述すればいいという主張は明快である。生活リハビリ講座のA-Iを参照。

■関係

目に見える身体だけを客観的に対象としてきた近代科学に対し、関係の中の身体をこれまた関係づけられた主体として見ていこうという新しい科学的方法は周知の事実。三好の場合、日本の老人との関わりの中で、“世間や身内の中の老人”を

提出するという、日本の現実から近代科学に切り込むところがユニーク。従来、日本人は「個人として成熟していない」と否定的に見られてきたが、三好は逆に、こうした日本の老人こそ普遍的だと言っているかのようなのである。自立は幻想であると言ひ、相互依存のあり方を個別に提起する彼は、PTにあるまじき人ではある。

■現場

従来の介護法や福祉論を批判するときによく使われるコトバ。現場体験のない学者や評論家のコンプレックスを撃つのに有効だが、彼の「現場」は空間的に老人介護の現場に働いていることを意味するのではない。むしろ、「現場の思想」とか「現場的発想」という意味である。従って「三好は今現場にはいないじゃないか」という批判は意味がない。「あなたは今現場にいるのなら、もっと現場的な方法論を提出したらどうか、私は喜んで真似させてもらうから」と三好に言いかえされるだろう。教科書に書かれているコトバや理念から出発して現実の老人にそれをあてはめようという方法論に対するアンチテーゼが「現場」である。それは当然、三好自身の著書やコトバについてあてはまる、という恐いコトバである。

■自己実現

『自己実現こそ福祉の目標』なんて言う人が多くてねえ。自己なんてよく判らんものか実現してしまうなんて、よっぽど単純な人なんだろうねえ。マズローの言う自己実現した人って、つまり社会的成功者で人格者ってことだけど、そんな人が裏で何してるか判りゃしない。しかも年とりゃみんな呆けて自己崩壊するんだし。近代的自己に対して“生きもの”を対置する三好に自己実現を語らせると皮肉たっぷり。

■人権派、倫理派

三好のこの間の論敵。彼に言わせれば「みんな意識が低いと嘆いてお説教をしたがる人たち」と

いうことになる。さらに、人間を意識の高低とか「人権」という抽象性で語ることは、医学が人間を関係から切り離れた個体としてのみ見ていることと表裏一体であると言っている。このあたりは、現在進行中の「関係障害学講義」（生活リハビリ講座プログラムC）が出版されると、そこで語られるはず。倫理派との論争については『正義の味方につける薬』を参照のこと。それにしても、この本の題名の皮肉なこと。

■生活

「いちばん生活感のない三好が“生活”を問いて回っている。俺みたいに子供が3人もいてみる、大変なんだぞ、生活は」とは、作業療法士のM氏のコトバ。「子供はつくらない、定着しない」と言い続けた三好も、今や一児の甘いパパだという。これは転向か、それとも成熟か？

■生活リハビリ

生活リハビリとは、ある特定の方法論や体系ではなく、リハビリという専門性が自己消滅する過程である、と『正義の味方につける薬』で語っている。つまり、1人ひとりの老人にとって、リハビリという専門性や専門家が不要となるような生活をつくりだすことが生活リハビリだ、という訳である。このあたりは竹内孝仁氏の思想的影響が大きいと思われる。

■体位変換

老人をダメにしてきた安静看護を象徴するコトバとして挙げられ、「寝返り介助」と言い換えよ、と主張する。コトバにはこだわらないという立場とは矛盾しない？

■南野陽子

ナンノのファンで、CD、LDまでもっているという噂は本当である。一方で音楽ならマーラー、女性なら吉田日出子や結城美枝子が好きなタイプだそうで、好みの巾が広いというよりは分裂気味である。

■PT

理学療法士（Physical Therapist）のことだが、「パーでもできるセラピスト」なんて、ミもフタもないことを言う。あえて過激なことを言って気を引こうという戦略という見方もあるが、三好は「現場の本音」と言い切る。かつて「現場のシロウト」であったときの、ひねた視点が今も続いている。そういえば、三好の語る内容は、今でも「現場のシロウト」であるような気がする。なお、OTは「おっともおらんでもいセラピスト」となる。

■プリコラージュ

構造主義として知られる文化人類学者、レヴィ＝ストロースが、近代的思考と生産方式（画一的大量生産）を越えるものとして提起したコトバで、手作りとか器用仕事と訳される。老人介護という、今の世の中の労働とはちょっと異なる仕事の意味を、こうした哲学的なコトバで位置づけるところが、三好の三好たるところ。参考文献『野生の思考』（みすず書房）

■変な人

「変な人だよ」「変わってるねえ」と三好が言うときは誉めコトバである。型にはまっていない人、個性的な人を意味し、彼の人間関係を形成しているが、ときに本当に変な人もいる。

■ボランティア

三好はボランティア嫌いで知られており、皮肉めいた引用で語られることが多い。現場で給料をもらうために働いていたときに、余裕のある人がやっているボランティアに対して感じた“ひがみ”がその根拠であることを本人も認めている。

■吉本隆明

三好が最も影響を受けている思想家。吉本ばなの父親。吉本に「老いについて」と題して講演させるのが夢だとか。